

故郷第四場面 読んだ読んだ

三年二組

氏名

今、母の口から彼の名が出たので、この子どものころの思い出が、電光のようの一挙によみがえり、わたしはやつと美しい故郷を見た思いがした。そのあと、近所にいる親戚が何人も訪ねてきた。その応対に追われながら、暇をみて荷ごしらえをした。そんなことで四、五日つぶれた。



主人公にとって、ヤンおばさんは、白粉を塗っていたし、頬骨も出ていなくて、口紅を塗っていた美しい人だった。また、主人公を抱っこするなど、面倒見のよい人だった。しかし、お金やヤンおばさんの内面と外見を変えた。白粉や口紅も買えないほど、お金はなくなり、主人公を「お金持ち」とか「知事様」など、嫌なことを言うてくるひどい人に変わってしまった。町全体が、お金がなくなっていく、主人公はかつて友達だったルントウのことが心配でたまらなくなった。

さん

主人公はヤンおばさんと再会した。昔のヤンおばさんは豆腐屋小町と呼ばれ、商売繁盛で性格も良かった。しかし、今のヤンおばさんは化粧もせず、コンパスのようにやせた。また、主人公に対してさげすんだりあざけったりして、昔とは全然違う、性格の悪い人になった。ヤンおばさんだけでなく、故郷全体が変わってしまった、人々はお金がなければ幸せではないという、マイナスな気持ちをもつようになった。主人公がコンパスと呼んだのは、ヤンおばさんだけでなく、このような故郷に幻滅して嫌な気持ちになったからである。

さん

主人公は、ヤンおばさんの変わりように驚いた。外見は歳を重ねるにつれ仕方がないことだが、内面までこんなに変わってしまうとは。昔は優しくだったが、今では正反対である。嫌みをさんざん言うし、事実ではないこともばんばん言うし……。主人公はヤンおばさんにあきれってしまった。さらに、怒りが混じり、名前を呼ぶのも嫌になるぐらい嫌いになった。ヤンおばさんがこうなってしまったのは、やはりお金がないからなのかと思う主人公であったが、お金だけの問題ではないと、何かほかに原因があるのではないかと感じる主人公であった。

さん

主人公は頬骨の出た、唇の薄い五十がらみの女に話しかけられた。まるで製図用の足の細いコンパスみたいだった。主人公はこれが誰なのか覚えていなかったが、母のお陰で豆腐屋のヤンおばさんであると思いつくことができた。昔のヤンおばさんは豆腐屋小町と呼ばれていて美人で優しくかった。そのお陰で、商売繁盛とされていた。しかし、今のヤンおばさんは、ほお骨も出て唇も薄い。さらに盗みやでたらめなど、性格も変わってしまった。そんなヤンおばさんに対して主人公は軽蔑し、あまり良く思わなかった。そしてもう名前も呼びたくない、ヤンおばさんのことをコンパスと呼ぶようになった。

さん

母との会話でルントウとの昔懐かしい思い出が主人公の頭に浮かんだ。主人公はやつと美しい故郷を見た気がした。しかし、その後、貧困に苦しんだ結果、外見も中身も変わってしまったヤンおばさんと会う。また一つの懐かしい思い出が蘇った主人公であったが、それと同時に、寂寥に満ちた故郷の村の現実を改めて思い知らされることになった。

くん